

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

新たなパレスチナ・イスラエル紛争論を模索する：
共同研究：
パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点
(2011-2014)

メタデータ	言語: ja
	出版者:
	公開日: 2015-03-23
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 菅瀬, 晶子
	メールアドレス:
URL	所属:
	http://hdl.handle.net/10502/5622

新たなパレスチナ・イスラエル紛争論を模索する

文
菅瀬晶子

共同研究 ● パレスチナ・ナショナリズムとシオニズムの交差点 (2011-2014)

2010年末、チュニジアのジャスミン革命を端緒として起こったアラブ諸国の民主化運動、通称「アラブの春」が現在もなお継続中であるのは、連日報道されているとおりである。しかしながら、独裁者が権力の座から追われた各国で新体制への移行がはかられているものの、その後の経過が決して順調ではないことは、先日おこなわれたエジプトの大統領選挙をみればあきらかである。

世界中で起こるすべての騒乱や紛争は、すべて今日に至るまでの、さまざまな事象が蓄積された結果として引き起こされる。一連の民主化運動で倒された独裁政権や、現在の中東諸国をなおもむしばみ続ける政治システムの多くもまた、過去にその要因を見出すことができる。本共同研究が取り上げる、パレスチナ・イスラエル紛争も同様である。イスラエルの建国理念であり、紛争の根源ともいえるシオニズムを生み出したのは、ヨーロッパの植民地主義やナショナリズムであることについては、すでに議論が重ねられてきた。しかしながら、シオニストのパレスチナ移住を経て、シオニズムが変化していったことや、そのシオニズムや周辺地域のアラブ・ナショナリズムからの影響を受けて、パレスチナ・ナショナリズムが萌芽していったことを考えれば、ヨーロッパ的ナショナリズム論だけでパレスチナ・イスラエル紛争を語ることも、また不十分といえよう。

60年以上もこじれ続ける両者の紛争を、第三者である日本人研究者という立場から再考し、イスラエルとパレスチナ双方の現状を分析するあらたな視点を見出すためには、どうすればよいのか。それが本共同研究を立ち上げた目的であった。目標として掲げたのは、イスラエルとパレスチナ双方のナショナリズムの比較研究である。埋もれていた双方の関係を示す事例の発掘や、現在も変容しつつある双方のアイデンティティ表象のありかたに重点を置いている。平成23年10月より開始された本研究は、現時点（平成24年7月末）で、合計3回の研究会を実施し、5名が研究発表をおこなった。そのうち、本稿では平成24年7月22日におこなわれた研究会での、鶴見太郎（学術振興会海外特別研究員）と田浪亜央江（成蹊大学非常勤講師）の発表をもとに、現在までの経緯を報告したい。

シオニズム、パレスチナとネーション

「シオニズムとナショナリズム論——いかにパレスチナ問題を論じるか」と題した発表において、鶴見がおこなったのは、ヨーロッパにおけるナショナリズム論と、そのなかで展開されてきたシオニズムの世界観とネーション概念の再考である。

現在、パレスチナ紛争を民族対立とみ

なす見解は批判されることが多いが、それはユダヤ人やパレスチナ人という定義が当事者にとっても曖昧な部分があり、「ネーション」という語そのものが中立的でないこ

とが一番の問題であると、鶴見はみなす。しかしながら、今日ユダヤ人定義と不可分の存在であるシオニズムは、アントニー・スミスの民族とナショナリズム論において、近代国家設立とは無関係に、それ以前から存在する「エトニ」としての集合意識から、歴史的記憶や文化などを共有する人びとの集合体である「ネーション」へと発展し、さらに「祖国」を必要とするに至った唯一の事例として挙げられているのもまた事実である（スミス 1998；1999）。そこで鶴見がこころみたのは、シオニズムの世界観と「ネーション」のありかたを、シオニズムの母体であったロシア東欧的世界観から再定義することであった。

シオニズムの母体であったロシア東欧的世界観において、シオニズムはまず「ネーション」という「称号」の獲得を目指すことから生まれ、のちに国家が保護すべき市民権としてのナショナルリティへと発展してゆく。19世紀末から20世紀初頭にかけてのロシア東欧では、国家は複数のナショナルリティの保護機構であるという認識のもと、差別から解放され



エルサレム、ヤド・ヴァシェムのホロコースト記念公園にて。ユダヤ人らを強制収容所に移送した貨物列車が、野外展示されている（2012年、菅瀬晶子撮影）。

つつあったユダヤ人もまた、ほかのナショナルリティとともに保護されるべき存在とみなされていた。やがて第一次大戦後、シオニストたちはポーランドなどの事例から、ユダヤ人を保護する国家としてのイスラエルの必要性を学ぶ。このような経過を経て、今日のイスラエルのシオニズム国家論が発生していった。

シオニズムのネーション概念や、アラブ（パレスチナ）認識をさらに議論してゆくには、市民や近代国家といった、すでに手垢のついた概念の再定義が必須である。当時のロシア東欧に大きな影響を与えたレーニンの国家論や、エンゲルスのコミュン論、さらにはオスマン帝国がパレスチナを含むシリア行政州に適用していたミレット制などが、そのための



ガリラヤ地方、ヤルカ村の製粉工場にて。ユダヤ教徒、ムスリム、キリスト教徒、ドルーズの共存をあらわす壁画（2012年、菅瀬晶子撮影）。

キーワードとなるであろう。

あらたに生み出される文化とアイデンティティ

田浪による発表「パレスチナ文化における『オーセンティシティ』の行方：ラクスを事例として」は、1967年以降のパレスチナでみられるようになった「トゥラース（文化遺産）」の対象化、および文化復興・再生運動のなかで、ラクス（ダンス）がどのように収集、継承され、さらには発展していったかを、ラクス集団の文化 NGO、エル＝フヌーンの活動を概観することによって考察したものである。

今日、パレスチナでラクスの代表とみなされているのは、ダブケと呼ばれる男性のラインダンスである。歌や笛の伴奏とともに、男たちが足を激しく踏み鳴らして踊るダブケは、今日もさまざまな祭事の場面でみることができる。しかしながら、このダブケがあたかもパレスチナ文化の象徴のごとく扱われるようになったのは、ごく近年のことであり、それは 1960 年代中盤、パレスチナ解放運動の高まりとともに起こった、さまざまな団体や個人による「フォークロア運動」によるところが大きい。以来、パレスチナ各地で数多くのダブケにかかわる運動をおこなう団体が誕生し、過去のダブケを保存・伝承するだけでなく、バレエやコンテンポラリー・ダンスの要素をまじえたダンス教育をさかんにおこなうようになった。これらの団体による活動をとおり、踊られるダブケそのものも、伝統的な内容から物語仕立ての演劇的・現代舞踊的な内容へと徐々に変化してゆく。そのような潮流の先駆者となったが、1979 年に創設されたエル＝フヌーンである。当初はフォークロア研究者の協力を得て、伝統的ダブケの保存活動をおこなっていたが、1987 年から 1993 年にかけての第一次インティファダ（イスラエルの占領に対する民衆蜂起）のさなか、メンバー内に激しい議論が起こり、後進教育を重視したボランティア・ベースの活動へと転換する。ただし、芸術的にはむしろより洗練され、近年は演劇的・風刺的内容を前面に押し出して、パレスチナの現状を反映させた作品を発信し続けている。

パレスチナ人とは、パレスチナの文化とはなにか。それらの問いに対する答えを考えるうえで、エル＝フヌーンの活動はひとつの明確な回答を提示している。すなわち、「パレスチナの文化」とみなされているものは、19 世紀から現在に至るまでの社会状況を反映し、創造されたものであるということである。伝統的ダブケの再現から、演劇的要素を強めたオリジナル作品の上演へと転換しはじめたエル＝フヌーンを、当時監修者でもあったパレスチナ・フォークロア研究の第一人者シャリーフ・カナールアナが、「伝統から逸脱している」と批判したというエピソードは、非常に興味深い。イスラエル

建国に伴う郷土喪失、ナクバ（「大災厄」）によってディアスポラを経験し、文化を破壊されたパレスチナ人にとって、フォークロア運動はみずからのアイデンティティを回復、あるいは発見するために、必要な作業であった。ところがポスト・ナクバ世代にとって、フォークロア運動で収集された文化は過去の遺物でしかない。グローバリゼーションの進む現代パレスチナに生きる彼らの目には、エル＝フヌーンのラクスこそが、自分たちを表現するものとうつつるのである。

一般に、文化が創造されるものだということは周知の事実であり、往々にして文化の捏造という、否定的なイメージをもって語られることが常である。では、エル＝フヌーンの作品は果たして、伝統から逸脱したパレスチナ文化の捏造といえるのであろうか。答えは否である。彼らの公演は世代を超

えた支持を集め、占領地のみならずディアスポラのパレスチナ人たちからも高く評価され、あらたなオーセンティシティを獲得している。さらに、このような変化の舵を取っているのが、イスラエルとの関係であることも見逃せない。田浪の発表では、イスラエルの民族舞踊集団からの間接的影響も指摘されている。イスラエルから学んだ要素も取り入れて、あらたな自己表象の手段を生み出してゆくさまは、本誌 135 号の拙稿で取り上げた、サイド（サイド）・カシューアによるテレビドラマ『アヴォダー・アラヴィット』とも共通する。かたや未来への希望をうたい上げ、かたや悪趣味ですらある諸諺に満ちたシニカルな内容ではあるものの、その多様性もまた、パレスチナの現状を反映したものといえる。

ナショナリズム論の再考とアイデンティティの文化表象という、異なる 2 本の軸をもちいて、どこまでパレスチナ・イスラエル紛争にあらたな視座を提示することができるか。2

年目となる今年度、さらなる事例を議論することによって、模索を続けてゆきたい。

【参考文献】

- アントニー、スミス 1998『ナショナリズムの生命力』晶文社。
- 1999『ネイションとエスニシティ：歴史社会学的考察』名古屋大学出版会。
- 2012『ユダヤ的かつ民主的国家』の起源についての一考察：ロシア・東欧史からの視座『日本中東学会年報』27(2)。

すがせ あきこ

民族社会研究部助教。専門は文化人類学・中東地域研究。イスラエルのアラブ人キリスト教徒をおもな調査対象とし、現在はムスリムとキリスト教徒、ユダヤ教徒が共有する聖者崇敬について調査を進めている。著書に『イスラエルのアラブ人キリスト教徒』（溪水社 2009 年）、『新月の夜も十字架は輝く：中東のキリスト教徒』（山川出版社 2010 年）などがある。



アイダ難民キャンプでのダブケの練習風景（2011 年、田浪亜央江撮影）。



エル＝フヌーンの公演の様相（2006 年、田浪亜央江撮影）。